



「なぜ」「どうして」から生まれる探究

園長 和島 千佳子

年長ゆり組は連休明けにヒマワリの種をまきました。毎日水やりしながらなかなか芽が出ないことを気にしていました。後からまいたアサガオのほうが先に発芽し「これは何かおかしい」と思ったAさんが土を掘ってみました。

すると、二つに割れた種の殻と、小さな芽のようなものが出てきました。近くにいた友達と「なに?」「なぜ?」と園の図鑑や本を探して調べると、まいた種の向きや日当たりなど、心当たりのあることが出てきました。その話題はさっそく学級全体に広まり、Bさんは翌日「家でも調べてきた」と自分で書いたメモを持ってきて皆に知らせていました。ゆり組では、調べて分かったことに気を付けて、もう一度新しい種をまくことにしました。

皆で日当たりのよい場所を考えてプランターを運び、よい種を見分けるために水に浸けて沈んだ種をまくつもりでしたが…種はすべて水に浮かびます。「まただめなのかな」「入れ物が大きいのかな」「水が多い方がいいのかな」「ずっと浸けておくといいのかな」と考えたことを言葉に表し、友達と試しています。しばらくすると少し沈んだ種もあり、全部まくことにしました。「種は横向きにね」「もちろんそうするよ」と声を掛け合いながら。

次の週明け、発芽した様子を嬉しそうに見るゆり組の子どもたち。子どもたちの試行錯誤の様子を知っている保護者の皆さんも一緒に喜んでくださいました。その後もヒマワリを大きく育てるためにはどうしたらよいか、皆で調べたり考えたりし、工夫しています。夏野菜の生長の様子にも目を向けよく観察しています。うまく育っていないのか心配なことがあると、図鑑等で調べ、解決法を考えて実行しています。

子どもたちは、周囲の環境に関わりながら、時にはこのような「思うようにならないこと」に出会います。その葛藤や疑問から、探究や工夫が生まれます。もし、ヒマワリがすんなり発芽していたら、ゆり組の子どもたちにこのような気付きは生まれず、生長への関心の寄せ方もまた違ったものになっていたことでしょう。

東京オリンピック・野球の金メダリストでMVP(最優秀選手)に選ばれた山田哲人選手の幼少期のエピソードを紹介します。抜群の身体能力でどんな競技も器用にこなしていた彼が、初めて野球をした日にバットに球が当たらず、ふてくされて帰ってしまったそうです。それがかえってやる気に火をつけたようで、今や日本を代表する野球選手の一人です。心を揺さぶられる「なぜ」「どうして」という体験は、誰かに強要されるものでなく、自ら湧き起こる、何よりの内発的動機付けになるのですね。

今回取り上げたのは年長5歳児学級の事例ですが、5歳児ばかりでなく、4歳児は4歳児らしく、学級の友達や先生との園生活を紡いでいます。時に困難にも出会いながら、それも糧になって「やってみよう」「こうしよう」の芽がすくすく育っています。



こんどは
めがでたよ!